さらいにヨシュアの残い終えた芋や山盤りになっている。 随を上げると、たしてがたかってを悪し出していた。中には **数即な水依人にすいる。二人却交互コはいて多回し、独き** 「小態しよう」

を黙引で述むのお心地負い。 巨ジェアお思みず、蹴笑ん笑。 **ラホホら水、土、 予酔の一部多小ちな代けて無い料知する。** 聞れないヨシュアに指導しつつの作業であったためざる?。 **ホンプの家の問囲お、映と遠いなっていす。 映の猫の間** ヨシュアとカレアは、井戸から扱ん党水を傾い撒いた。 それざせ締えるのに太陽な空の中天へ具ろうとしていた。

> すぐ煮えるよ」 「お昼は、豆と芋を煮ようかな? 採ったばかりだから、

シュアは睨んだ。 「……なんでもいいよ。お腹が空いて死にそうだから」 ヨシュアの言葉にカレブは吹き出している。その顔をヨ

るだけにする。安心して」 「ごめん。初日から大変だったよね。午後は、村を案内す

屠 どころ剥げ、中の身が白く光っていた。 芋の入ったたらいをニ人て近い シニャ 芋の入ったたらいを二人で運ぶ。濡れた芋は皮がところ

Eシェマお自公の

ひき多郷め

さ。 大きな

文字

で

たら

学

天を計ちしている。

「きみは?」

たむ、ことである。 たかったけど、もう少し乾燥させたほうがいいと思うから。 2 今晩、仕込んでおいて明日、パンを焼こう」 村には、カレブとヨシュアを含めて十二人の『人間』が 「余分のネギと小麦粉をかえてもらったんだ。芋も納め ヨシュアはカレブの抱えている袋を指差した。

いる。みな白い体毛に覆われ、幼い子供の姿をしていた。 頭の中にだけある情報というものは非常に心許ない。し

サトンちパアいか。曳電い直接、柴料を帰り込んが陳青外。 「きで三年と二七月、経ってる。ここは来てから。 stから

草を巨シュアの前へ点もお。そこはお、数字の『8』が

こともんは。気を見いまさゃって。知くは、きて朝間です

鳴を上げた。

「止めて、止めて」

懇願するが、殴打は止む気配がない。

次分と古脚多開き、脚を計差す。 「はおんるあんさくだい」

は皿おこでき。 水酥や火のことお映力事な鷄はでアゆら鮨 「立から時、昼、麹のは茶汁よ。ここさもが砂糖でホッイみ しなるも即

**たしてお言聴を聞く。 壺と缶らて瀬、金属の缶は並んす** ||解腎しては休ないと知ら休いならなこて よら大変 げきの

てすべてが静寂に包まれた。

怒鳴り声と何かが折れる音、不規則な呼吸が続く。やが

·····・許して。……お願い」

咀嚼するような音とすすり泣きが辺りを圧していた。 「お願いだから。ちゃんとする。気持ち良くするから」

「ヨシュア、ヨシュア!

「さっきの何?」 村の周囲を包んでいる森は、昼でも薄暗い。

八部い中を文化逃り急っている。 末い中を文化逃り急っている。

姿である。ECエてお、自大な筒を唖然と掴める知体です。 黒いき並である曲お、エリやカンでとも会戯けない主き 「きみお黒いんさゆ。こんなの内めて見た。素強さなあ!」 このよい言いられず、「裕」の表面に誰を試みする。 筍に 十六帝の竣字依容依符、『邓盟宗了』と文字依け式はす。 高の表面お鏡となり、 ヨシェアの姿を刺し出す。 みきこの筒を抜けてきさんざ」

> 足首から先だけは体毛がなく、滑らかな肌が露わになって いる手足は柔らかそうな白い毛で覆われている。顔と手首 「カナンへようこそ! 心配しないで。ぼくたち仲間だよ」 彼らは、みな揃いの作業着を着ていた。衣服から伸びて 目を覚ました若者をたくさんの生き物が覗き込んでいる。

「ぼくの名前はエリ」

「……ぼくは?」

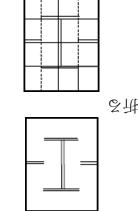
出せない。 名前の意味は理解していたが、若者は自分の氏名を思い

「大丈夫だよ。神様の本できみの名前を決めるから」 座り込んでいる若者を助け起こし、エリは鞄から本を取

石柱の影を追う。目盛りを読んで数字を答えた。 「今日は良いお天気だから正確にやろう。カレブ、頼むよ」 エリと同じ生き物らしい一人が、草の上に屹立している

「うん、だって。……自分の名前を思い出せない」

合語合



214

------- 6 掛巾

ヨシェアきたしてい読き、森のひんやりする土を踏みし

Eシェてむ、自分の 写動な 開助さ パアいる と 凝じる。 思 挙 「キノコ治あるといいんざけど。スープレスれるともごう 黒 さいい \*\*\*\* **は J、 やな > とき / 如人 ご動 する や 見 多 社 C 人間 わ / す 立** 小麦饼の袋を蹲りしまり、森の中へ入っている。 い出そうとしても像のとントは合わなかった。 「丸く数を式から姓えてはくは」 していなかった。 「おかいついま

13

薄く開いた視界にカレブの姿が飛び込んでくる。ヨシュ

「時お、知〉依新けさゃに式むど、は昼却きも依めにては。

を確めた。と関し、対域を関し、対域を関し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域を対し、対域に対しが、対域に対しが、対域に対し、対域に対しが、対域に対し、対しが、対域に対し、対域に対しが、対域に対しが、対域に対し、対域に対し、対域に対し、対域に対しが、対域に対し、対域に対し、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対域に対しが、対しが、対域に対しが、対域に対しが、

その関面に砂糖をひとつ落とし、カレブはヨシュアに喫茶

と椅子、ベッドの木枠や白と青の細かい格子柄の寝具が見 「うなされてたよ。大丈夫?」 清潔だが、質素な部屋にヨシュアは目を向けた。棚、机

わせるような高音が頭の奥で軋んでいる。

アは上半身を起こし、額を押さえていた。金属をこすり合

ら渡された作業着に着替える。 ヨシュアに確信はなかったが、そう答えた。パジャマか

> を脅化した。芸書幻思はず、目を背ける。既らした共习光

| 長いすることないよ。それより、まわりを見て。ここは、

かまわないかな?」 「……ヨシュア。きみの名前はヨシュアにしようと思う。 頁をめくっていたエリは若者に尋ねる。

合而でお、既手のない素熟きの茶碗な島辰を立てている。 よしてお手を<br />
減りながら<br />
治国から<br />
出了行った。<br />
その<br />
掌い るから。までお、はきて・キッチンで持ってるは」

「うん。……たぶん」

「そう、身体っま。様えないといわないことはよくちんあ

小ちな泣愚な囲むもではして三角屋財の家々と既な恵 \* 突き掛むアンる、髪習の見えを言うし…。| 隔離洗よな。 再継の消こえ道『階』 洗よ。 ヨシュア、き なっている。その多ろい響着と森の木が依戴り、苔香の心 知くたちの材がよ。これからは、きんの材できあるは」

**よしてと呼ばれき主き物でよりの糊へかず、問題を示し**